

泣くままの中に

甲 「先生、お懐かしゅうございます。……待っていました。」

乙 「泣かなくてもいいでしょう。どうしました。」

甲 「先生、私は何という愚痴の深い女でございましょう。あれほどみ教えを聞きましても、やはり愚痴がこぼれます。あの子（死んだ子ども）のことが忘れられません。私がつとどうかしてやったら死にはしなかつたであろう。だれが彼がつとよい具合にしてやつてくれたら死にはしなかつたであろうと、そればかり考えて、かわゆうて、悲しくて、いまだに毎日泣いてばかりいるのでございます。だれに訴えようもないのでございます。涙を乾かそうとすればするだけ、お念仏申しても、おお私はしよせんたすからぬ奴でございます。こんな愚痴な私では……」

乙 「ご同情申します。私も知っています。わが子が死んだほど苦しいものにはございません。物事が順調に進んでゆく時には、何もかも、やりかたがよかつた、だれの考えがよかつた、だれのやりかたがよかつたという形でなされてゆきます。悪く進んだ時には、だれが悪かつた、彼が悪かつたと、すべてが悪い形で表われてきます。あなたのお子様があんなことで亡くなられたのも、すべてが悪かつた形で運ばれていったのです。善いことも受け取らねばならぬとともに、悪いことも受け取らねばなりません。宿業です。ただ受け取らしてもらうほかありません。」

甲 「それなのに私はただ泣いてばかりいます。どうして涙が乾かないのでございましょう。」

乙 「だれが涙をほせと言いました。お泣きなさい。お泣きなさい。涙が枯れるまでお泣きなさい。親が泣いてやらないでだれが泣いてやります。泣きなさい。泣きなさい。心ゆくばかり泣きなさい。」

甲 「それがお救いの邪魔にはなりませんか。」

乙 「何を言うのです。あなたに泣くことがなくなれば、笑うこともなくなってしまう。喜怒哀楽の上に人生があるのです。泣くこともなくなり、笑うこともなくなってしまうたら、人は石と同じになります。笑える時には笑うのです。泣ける時には泣くのです。それが人間のすがたです。あなたは今、人生でいちばん深刻な悲哀に打ちあつたのです。暗いのが、さびしいのが、悲しいのが当然です。胸打ち開いて泣きなさい。悲しい時には悲しむよりほかないのです。さびしい時にはさびしがるよりほかないのです。」

甲 「ああさようでございますか。それでは、この涙のままにお念仏申さしていただいてもいいのでございますか。」

乙 「いいの、悪いのではないのです。そのみが与えられた道なのです、泣きながらの中に、悲しみながらの中に、ただお念仏しましょう。南無阿弥陀仏の中に、その悲しみもさびしみも、罪も悪も、子どももあなたも、一切をなげ入れてしましましょう。こうした罪障のただ中にこそ、如来の誓願は打ちたてられ、法蔵の願力は働きたもうのであります。」

『一滴また一滴、血の涙、なかに仏もすすりなきます。』

一切衆生の苦悩のつきた日、法蔵の願心はなくなる時です。如来はただ、群生の苦しみを苦しみ、衆生の悩みを悩みとします。今あなたが抱いて泣いていなさる、断ちきることのできない恩愛こそ、そのまま如来の大悲を生み出した根源であります。苦悩をなくするのでなくて、苦悩のままに合掌し、念仏申しましょう。」

甲 「ありがとうございます。ただこれ合掌しかございません……………。親に遇うたような気でもご心配をかけてすみません……………」

乙 「どういたしました。私こそありがとうございます。」